き、日本の左翼的勤勞働者運動が、黨と言はず、組合と言はず、コミンターンの諸關係から斷然分離し、迫り來る社會的變化に適應すべく新たなる基準に於てラヂカルに再編制せられねばならぬことを主張する。

× × × ×

コミンターンが日本の特殊性を根抵的に研究せず、ヨウロッパの階級鬪爭の經驗殊にロシア革命の經驗にあてはめて日本の現實を引きずつて行く傾向は、我々の夙に指摘してゐた所であるが、昨年五月發表の日本問題新テーゼはかゝる傾向の頂點を示して居る。その著しき誤方法論的誤謬の二三を示す。同テーゼの冒頭は、日本資本主義の「特殊に攻撃的な强盜性」なるものに對する自由主義的憤激を以て始まつて居る。資本主義は比喩的に言つてどこでも「强盜的」だつた。歴史は、イギリス、フランス、アメリカ、前代ロシアのは神士的だつたが日本のは强盜的だつたなどと敎へて居ない。問題は、十九世紀後半に

日本が他國の殖民地とならず、自ら資本主義として發展したことが當時の事情の下において莫大な革命的意義を有したことにある。それは歐米資本の重壓に呻吟するアジア諸民族の覺醒と革命的鬪爭を早め、以て世界史の進歩の有利な條件を創造した。この歴史的必然、この世界史的意義をヌキにして日本資本主義の全發達過程をたゞ强盜と罵つてみても何等科學的なものはない。これは蘇聯邦リトヴイノフ外交が日本及び支那に關して國際聯盟のブルジョア諸國と一致するに似て、コミンターンの指導者も亦滿洲事變以後の日本に對してヨウロッパの自由主義者と同じ興奮に驅られてゐるのを示すものであるが、更にこのテーゼは日本において君主制反對の大衆鬪爭が渦卷いてゐるとか反戰的大衆運動が激化してゐるといふ、支那及び歐洲で捏造された虛構の事實を基礎として全部のテーゼを引出してゐる。主觀的希望を以て客觀的事實をゆがめ之を戰術の基準とするが如きは、革命家として恥づべきことであり、このテーゼの作者は詩人であつても、プロレタリ